

# 多治見方言における形容詞のアクセント

安 藤 智 子

富山大学人文学部紀要第 66 号抜刷

2017年2月

# 多治見方言における形容詞のアクセント

安藤 智子

## 0. 本稿のねらい

東京式アクセントに属する諸方言のうちでも内輪東京式アクセントを示す名古屋方言などでは、形容詞のアクセント型の区別がないことが知られている(山口 1984, 山田 2003 等)。一方で、東京方言自体(中輪東京式アクセント)における形容詞のアクセントはゆれや変化が著しいことが指摘されており(小林 2003 等)、共通語として扱われるアクセント辞典の記述においても、特に終止形以外の活用形については複数のアクセント型が併記されている場合がある。現在のこうした状況では、各方言のアクセントの伝統的な形とその内的動機づけによって変化した形、さらに共通語化などの外部からの影響が混然としており、どれが伝統的でどれがどのような事情で変化しているかを厳密に見定めるのは困難である。とはいえ、他の品詞と同様に形容詞においても記述しておくことは、その方言の位置づけや共通語化の程度、水平化の傾向などを推し量るうえで必要であると思われる。

本稿では、内輪式と中輪式の境界にあるとみられる多治見方言(岐阜県東濃地方西部, 安藤 2015, 2016)の形容詞のアクセントについて、2013年の調査記録を整理する。

## 1. 内輪東京式と中輪東京式の相違

岐阜県の東京式アクセントを持つ地域のうち、ほとんどの地域が内輪東京式アクセントを持つとされるが、金田一(1977, 1978)等の分布図によれば美濃地方の南東部(恵那市南部・中津川市南部)には東京と同じ中輪東京式の地域がある。しかし、実際のアクセントの境界線は、当然ながら、比較する項目によって異なっている。

内輪式(尾張方言)と中輪式の主な相違点は、山口(1984)を参考にまとめると表1のようになる。すなわち、1拍名詞2類と、3・4拍形容詞「1類」および3・4拍一段活用動詞「1類」のアクセント核の有無である。なお、金田一(1974)や国語学会編(1980)に示された類別語彙では4拍形容詞・4拍一段活用動詞を示していないが、山口(1984)では4拍語も3拍語と同様に1類、2類と呼んでいる。本稿では表1よりのち、便宜上の形容詞・動詞の語彙のグループ名として3拍語も4拍語もまとめて、山口(1984)の1類に相当するものを1類、2類に相当するものをII類と呼ぶことにする。

表1 内輪式（尾張）と中輪式の比較（山口 (1984: 11f) による）

	1拍名詞			3・4拍形容詞終止形		3・4拍一段動詞終止形	
	1類	2類	3類	1類	2類	1類	2類
内輪式	無核	有核	有核	有核	有核	有核	有核
中・外輪式	無核	無核	有核	無核	有核	無核	有核

多治見市と同じ東濃地方に属する加子母村（現・中津川市加子母）は、金田一（1977, 1978）等の分布図では内輪式の地域に属しているように見える。しかし、ここでは、奥村（1976）、山口（1992）によれば、形容詞終止形がいずれも有核であるという内輪式の尾張と同じ特徴を持ちながら、1拍2類名詞が無核であるなどの中輪式の特徴をも示しているという。そこで、山口（1992）では、尾張のように1拍2類名詞や1類一段動詞も有核の内輪式A型と区別して、形容詞のみ有核の加子母村のタイプを内輪式B型と名付けている。これをまとめると表2のようになるが、ここでは語頭から数えたアクセント核の位置を丸囲み数字で示す（①は平板型）。表2には、安藤（2015, 2016）の調査に基づく多治見市土岐川右岸側（おおむね、旧可児郡）と土岐川左岸側（おおむね、旧土岐郡）のアクセントを加えて表示する。形容詞については分析前の予測であるが、加子母村と名古屋市の間に位置し、道路や鉄道の配置により尾張地方と東濃地方を結ぶ主要な玄関口となる多治見市では、形容詞もやはり内輪式の有核となることが予測される。

表2 多治見方言の位置づけへの試論

	尾張型内輪 (内輪式A型)	多治見 土岐川右岸	多治見 土岐川左岸	加子母村等 (内輪式B型)	中輪・外輪
1拍2類名詞	①	①	①	①	①
3拍I類一段動詞終止形	②	① (②)	①	①	①
4拍I類一段動詞終止形	③	① (③)	①	①	①
3拍II類形容詞終止形	②	②予測	②予測	②	①
4拍II類形容詞終止形	③	③予測	③予測	③	①

しかし、形容詞のアクセントは活用形によって変動するので、終止形のみを記述するのでは不十分である。山口（2003）は東京式アクセントの諸方言における形容詞のさまざまな活用形についても記述しているので、ここで内輪式・中輪式について紹介したい。

表3, 4では、山口（2003）で示された内輪式の愛知県名古屋市、中輪式の愛知県岡崎市における形容詞の諸活用形のアクセント核の位置を語形とともに示し、NHK放送文化研究所編（2016）（以下、『NHK』と略記）で対応するものと並べて示す。なお、山口（2003）の名古屋は、I類とII類がすべて同一であるとして同じ型で示されているので、ここでもまとめて示す。また、アクセント型は全て数字により表に示されているが、語形（語音の配列）はすべて表示されて

いるわけではないので、山口(2003)の注に従って補うものとする。

表3 形容詞活用形のアクセントの比較 (3拍語)

語類	I類・II類	I類		II類	
語例	赤い・早い	赤い	甘い	早い	うまい
	名古屋	岡崎	『NHK』	岡崎	『NHK』
A終止	アカㇿイ	アカイ=	アマイ=	ハヤㇿイ	ウマㇿイ
B接合	アカㇿイト	アカイㇿト	アマイㇿト アマㇿイト アマイト=	ハヤㇿイト	ウマㇿイト
C接二	アカㇿイナラ	アカイナㇿラ	アマイㇿナラ アマㇿイナラ	ハヤㇿイナラ	ウマㇿイナラ
D仮定	アカケㇿヤー	アカケㇿリヤー	アマㇿケレバ	ハヤケㇿリヤー	ウㇿマケレバ ウマㇿケレバ
E未来	アカカㇿㇿト	アカカㇿㇿト		ハヤカㇿㇿト	
F過去	アカカㇿㇿッタ	アカカㇿㇿッタ	アマㇿカッタ	ハヤカㇿㇿッタ	ウㇿマカッタ ウマㇿカッタ
G中止	アㇿカテ	アカㇿㇿテ	アマㇿㇿテ	ハㇿヤㇿㇿテ	ウㇿマㇿㇿテ ウマㇿㇿテ
H中接	アㇿカㇿㇿテモ	アカㇿㇿㇿテモ		ハㇿヤㇿㇿテモ	
I連接	アカナㇿㇿル? <sup>1)</sup>	アコー= (ナル)	アマㇿナㇿㇿル	ハㇿヨㇿㇿナル	ウㇿマㇿナㇿㇿル ウマㇿㇿナㇿㇿル
J強消	アㇿカナイ	アカカㇿㇿナイ	アマㇿㇿㇿワ アマㇿㇿㇿワ	ハㇿヤㇿㇿカーナイ	ウㇿマㇿㇿㇿワ ウマㇿㇿㇿワ

『NHK』では、いくつかの語形でゆれを反映して複数のアクセント型が示されているが、3拍語で掲載されている型のうちのいずれも名古屋と合致しないのは、II類ではD仮定形とF過去形のみである（注1に示したとおり、名古屋のI連接形には疑問があるが、表3に示したとおりであればこのI連接形もここに加える）。一方、I類では、『NHK』で名古屋と同じ型が許容されるのがB接合形とC接二形のみ（名古屋のI連接形が表3に示したとおりであればこのI連接形もここに加える）であり、ほかは記載のある語形すべてのアクセント型が異なっている。東京と同じく中輪式の岡崎は、II類は『NHK』と同じ型が多いものの、D仮定形とE未来形、F過去形はI類・II類ともに名古屋と同じであり、I類は少なくともC接二形、G中止形が『NHK』とも名古屋とも異なる型を示す（I連接形は「0」と記述され、語幹のアコーの中にはピッチの上がり目がないことを示すと見られる。ナㇿㇿㇿに上がり目があれば『NHK』およびおそらく名古屋と同じとみなせる）。

表4 形容詞活用形のアクセントの比較（4拍語）

語類	I類・II類	I類		II類	
語例	危ない・少ない 名古屋	危ない 岡崎	冷たい 『NHK』	少ない 岡崎	短い 『NHK』
A終止	アブナ㇏イ	アブナイ=	ツメタイ=	スクナ㇏イ	ミジカ㇏イ
B接合	アブナ㇏イト	アブナイ㇏ト	ツメタイ㇏ト ツメタ㇏イト ツメタイト=	スクナ㇏イト	ミジカ㇏イト
C接二	アブナ㇏イナラ	アブナイナラ	ツメタイ㇏ナラ ツメタ㇏イナラ	スクナ㇏イナラ	ミジカ㇏イナラ
D仮定	アブナケ㇏ヤー	アブナケ㇏リヤー	ツメタ㇏ケレバ	スクナ㇏ケリヤー	ミジカ㇏ケレバ ミジ㇏カケレバ
E未来	アブナカ㇏ロ㇏ト	アブナカ㇏ロ㇏ト		スクナカ㇏ロ㇏ト	
F過去	アブナカ㇏ロッタ	アブナカ㇏ロッタ	ツメタ㇏カッタ	スクナカ㇏ロッタ	ミジカ㇏カッタ ミジ㇏カカッタ
G中止	アブ㇏ナテ	アブ㇏ナクテ	ツメタ㇏クテ	スクナ㇏クテ	ミジカ㇏クテ ミジ㇏カクテ
H中接	アブ㇏ナクテモ	アブ㇏ナクテモ		スクナ㇏クテモ	
I接続	アブナナ㇏ル	アブノー= (ナル)	ツメタクナ㇏ル	スクノ㇏ーナル	ミジカ㇏クナ㇏ル ミジ㇏カクナ㇏ル
J強消	アブ㇏ナナイ	アブ㇏ナカーナイ	ツメタク㇏ワ ツメタ㇏クワ	スクナ㇏カーナイ	ミジカ㇏クワ ミジ㇏カクワ

4拍語でも、『NHK』の記述がいずれも名古屋と合致しないのは、II類ではD仮定形とF過去形、I接続形のみである。一方、I類では、『NHK』で名古屋と同じ型が許容されるのがB接合とC接二、I接続形であり、あとは記載のある語形すべてのアクセント型が異なっている。岡崎は、I類ではD、E、F（おそらくはIも）が名古屋と同じで、Cが独自の型であり、そのほかは『NHK』と同じである。II類では『NHK』と同じアクセント型が多いが、E未来形とF過去形は名古屋と同じである。

## 2. 調査方法

本節では、3節で結果を考察する調査について、共通する方法や手続きを紹介する。調査方法と調査地の詳細については、安藤(2015, 2016)と共通であるので、ここでは省略し、概要を述べる。

調査時期：2013年9月

調査対象地域：多治見市立の13小学校の校区のうち、新興住宅地が大半を占める北栄小学校校区および脇之島小学校校区の2校区を除く表5の11校区とする。

表5 調査対象地域<sup>2)</sup>

小学校	位置, 校区内の駅等	1934年初頭の区分・位置
南姫	最北西部, JR 太多線姫駅	可児郡姫治村
根本	北部, JR 太多線根本駅	可児郡小泉村北部
小泉	西部, JR 太多線小泉駅	可児郡小泉村南部
池田	南西部, 下街道宿場町, 土岐川右岸	可児郡池田村
精華	中央北部, JR 多治見駅, 土岐川右岸	可児郡豊岡町南部
共栄	北東部, 土岐川右岸	可児郡豊岡町北部・土岐郡泉町久尻
養正	東部, 土岐川左岸	土岐郡多治見町北東部
昭和	中央南部, 土岐川左岸および右岸	土岐郡多治見町南西部
市之倉	南部, JR 中央線古虎溪駅, 土岐川左岸	土岐郡市之倉村
滝呂	南東部	土岐郡笠原町北部
笠原	最南東部	土岐郡笠原町南部

調査対象者：各調査対象地域校区において生え抜きの1934～1955年生まれの3名（市之倉小学校のみ4名）で、性別は問わず、合計34名とする。以下、個人を表6の記号により表示する。記号冒頭の漢字は小学校校区（小学校の名称の頭文字）、数字は西暦の生年下2桁、末尾のm/fは性別（男性／女性）を示す。表6に示した生育地はすべて多治見市内の町名である。

表6 調査対象者

記号	生育地	記号	生育地	記号	生育地
南41f	大藪	精37m	大正	市41m	市之倉
南42m	大藪	精40m	本	市44m	市之倉
南50m	姫	精44m	小田	市45f	市之倉
根38m	根本	共47ma	小名田	市47m	市之倉
根40m	根本	共47mb	高田	滝40m	滝呂
根41m	根本	共47f	高田	滝45m	滝呂
小34m	小泉	養49ma	平野	滝48m	滝呂
小35m	小泉	養49mb	上	笠46m	笠原
小55m	小泉	養52f	生田	笠48f	笠原
池36m	池田	昭34m	田代	笠49m	笠原
池37m	池田	昭41m	錦		
池47m	池田	昭48f	錦		

調査語の選定方法：できるだけ似た文脈で形容詞が用いられる例文ができるように考慮しつつ、山口(1984)の調査項目の3・4拍形容詞I類・II類から「赤い・明るい・白い・う

れしい」を抽出した。さらに、3拍語では音節構造の異なる例を検証するため、「遠い・多い」を加えた。4拍形容詞Ⅱ類ではク活用形容詞のⅡ類を補うため、「短い」を加えた。調査語の親密度の判定にはNTTデータベースシリーズ『日本語の語彙特性』に採録されている語の「単語親密度」のうち「文字音声親密度」を用い、これらの調査語の親密度が十分に高い（5.800以上）ことを確認した。

調査語：調査に用いた形容詞は、次のとおりである。

3拍語Ⅰ類：赤い・遠い

3拍語Ⅱ類：白い・多い

4拍語Ⅰ類：明るい

4拍語Ⅱ類：うれしい・短い

調査項目となる活用形：山口(2003)を参考に次の語形を調査した。

A 終止形（～イ）

A' 連体形（～イ）

B 接合形（～イト）

D 仮定形（～ケヤ、～ケリヤ）

F 過去形（～カッタ）

G 中止形（～[ク]テ）

H 中接形（～[ク]テモ）

I 接続形（～[ク]ナル）

J 否定形（～[ク]ナイ）

東京方言および共通語においては、Ⅰ類形容詞が連体形より終止形で起伏式になる傾向が強いことが指摘されている（小林 2003, 塩田 2016等）。このことが多治見方言に当てはまるか否か確認するために、A' 連体形を追加する。

また、山口(2003)の調査項目のうち、C 接二形のひとつである「～イナラ」は、多治見方言ではD 仮定形で言われることが多く、自然な調査文を作りにくいと割愛した。E 未来系も同様に、「赤かろうと（思う）」は「アカアヤラアト」～「アカイヤロオト」（さらに古くは「アカカラスト」）、「赤かろうと（青かろうと）」はH 中接形で「アカテモ」のように言うことが多いため、調査項目に入れなかった。

調査項目Jは山口(2003)で名古屋および静岡県浜松市等について「J 強消」とされており、名古屋では「ヨーナイ、アカナイ、アブナイ」の形とのことである。最後の「アブナイ」は「アブナナイ」の誤りであろう。これらは、それぞれ「良くない、赤くない、危なくない」の意である。一方、浜松についてはJ 強消の例として「1 < 赤カー（ナイ）、良カー（ナイ） >、2 < 赤クモ（ナイ）、良クモ（ナイ） >」を挙げ、岡崎の語形は浜松に準ずるとされていることから（岡崎に

については「J接続」としているが、誤りであろう)、共通語で言えば「赤くはない」「赤くもない」などの形を指すものと考えられる。「赤くない」という単なる打消（否定）に対して、「赤くはない」が「強消」と称されているのであろうが、浜松・岡崎では「赤くない」に相当する項目は設定されていない。多治見方言では名古屋と同様に、形容詞の否定の形として「ヨーナイ～ヨナー、アカナイ～アカナー、アブナナイ～アブナナー」の形が伝統的に用いられ、「強消」との相違を調査対象者に示すのが困難であるため、「ナイ」の前に共通語的な「ク」が入る場合を含めて、これを「J否定形」として扱うことにする。

調査によって得られた発音には、安藤(2013)で検討された連母音の長母音化が生じているもの(例えば、「赤い」[aka:])もあるが、本稿の分析ではアクセントのみに焦点を絞り、長母音化した語形と連母音の語形との違いについては掘り下げない。ただし、音の脱落などにより拍数の異なる形態や子音の交替については別に指摘する。

### 3. 調査結果と考察

#### 3.1 語形のばらつき

アクセントの観察に入る前に、本節では、調査で得られた語形について整理しておく。調査は読み上げに近い形式で行ったが、選択式の要素を含む。具体的には、連母音の長音化が予想されるA終止形ならば、共通語形(連母音を含む)を文字で示したうえで、事前に「例えば、『高い』という言葉は『たかい』または『たかー』のように、ふだんの言い方で言ってください。」と依頼した。また、連母音の長音化以外の点で異なる語形が予想される活用形については、「赤(く)なる。または あこなる。」のように複数の候補を文字で示したうえで、普段の言い方を複数選択可として選択して発音するように依頼した。その結果、予測しない語形も得られたが、例えばG「短くて」をミジカーデ(「短いから」の意)、H「赤くても」をアカデモ(「赤でも」)のように別の形態素を用いて言ったものは分析から除外する。

以下、調査項目ごとに語形を見ていく。

A終止形およびA'連体形とB接合形では、連母音の長母音化(例えば、「赤い」[aka:])が3割強(「うれしい」を除く)の人に見られた。また、「赤い」[akka:]、「明るい」[akkartu:]のように促音を挿入した発音も2名に見られた。この方言で形容詞の語幹に促音が挿入されることは、自然発話ではインテンシティのかかる場合を中心に頻発し、多治見ことば編集委員会編著(1974)等の文献でも促音化の傾向が指摘されている。しかし、今回は読み上げによる調査であり、促音が挿入された候補は文字で示されなかったために、出現が少なかったものと思われる。

D仮定形では、どの語でも「～ケヤ」と「～ケリヤ」が現れた。調査方法の影響があることが考えられるのでその出現数の詳細には踏み込まないが、結果だけを見れば、どの語でも2つの語形が拮抗している。安藤(2016)で述べたように、動詞にもこの両形が現れるが、ケリヤは



共通語的な口語として他地域でも聞かれるものであり、名古屋と同じケヤのほうが方言的な印象が強い。なお、同じ調査方法でありながら、多治見市内で地域的な偏りが観察され、土岐川右岸側ではケリヤ、左岸側ではケヤの割合が高かった。

表7 D仮定形の語形（生育地別、出現数）

	ケリヤ	ケヤ	計
土岐川右岸側	82 (71.3%)	33 (28.7%)	115
土岐川左岸側	29 (30.0%)	68 (70.1%)	97

F過去形は、全員が語幹+カッタの形であり、共通語と同じである。

G中止形・H中接形・I連接形・J否定形は、共通語ではすべて「語幹+ク」を含むが、江端(1987)や彦坂(1989)によると、尾張地方や美濃地方においては地域によりウ音便形やその変異形が現れ、「ク」を含む形との混用もあるという。ウ音便の変異形とは、「暖くなる」の意のヌクトーナル（ウ音便）に対してヌクトナル、ヌクターナル、ヌクタナル、「涼しくなる」の意のスズシューナル（ウ音便）に対してスズショーナル、スズシーナル、スズシナル、スーシナルなどのことである。今回の調査でも、「ク」がないウ音便系の語形と「ク」がある語形とが現れた。「ク」がない場合には、単に共通語形から「ク」が抜けた語形(Ø)のほか、語幹末母音が引き延ばされて引き音が挿入された語形になる例もあった。例えば、G中止形では、「ク」の入るアカクテのほか、アカテ(Ø)、アカーテ（引き音）が観察された。調査方法の影響も考えられるが、ウ音便の変異形のうち、アコテのように母音が変化する語形は、各項目で1名あるか否かという少数であった。それぞれの語形の出現数は、表8のとおりである。表8では、2通りの発音をした被験者については重複して数えている。表中、「\*」の付いた語形は候補として文字で示していないにもかかわらず発せられたものである。

表8 ク形に対応する語形のばらつき（出現数）

	ク	引き音*	Ø	その他
G__テ 中止	106	21	109	-クッテ*4, アコテ1, トオクテ*1
H__テモ 中接	101	15	112	-クッテモ*3, ウレシューテモ1
I__ナル 連接	93	42	105	ミジコーナル*1, ミジコナル*1
J__ナイ 否定	111	7	121	ウレシューナイ1, ミジコーナイ*1, オオーコトナイ*1
合計 (全出現数958中の%)	441 (42.9%)	85 (8.9%)	447 (46.7%)	計15 (1.6%)

表8からは、「ク」のある語形と「ク」も引き音もない語形 (0) が拮抗しているように思われるが、文字を通した調査方法が語形の選択に影響を及ぼしていることが考えられるので、この表の数値については、以下の節でアクセントのデータの母数を示すための根拠とするにとどめる。ただし、語幹に長音を含む「多い」「遠い」では、引き音が挿入される語形が他の語に比べて非常に少なく、Gでトオークテ、Hでトオークテモが1名ずつのみであったことを指摘しておきたい。

### 3.2 アクセント調査の結果と分析

アクセントについては、市内での地域による差異は特に見られなかったので、以下では市全体についてのアクセント調査の結果を紹介し、分析を述べる。

#### 3.2.1 3拍語

4以下の出現型を無視して全体的傾向をまとめると、終止形が3拍の各語の活用形のアクセントは表9のようになる。ここでは、アクセント型を語頭からのアクセント核の位置（第xモーラ）として丸囲み数字で示す。なお、後述するようにピッチの顕著な下がり目が2か所現れる場合もあるが、表ではそのうち語頭に近いものの位置を示している。複数のアクセント型があるものは、出現数の多い順に並べる。

表9 多治見方言における3拍形容詞活用形のアクセント型

	I類		II類	
	赤い	遠い	白い	多い
A終止	②	①～②	②	①～②
A'連体	②	①～②	②	①～②
B接合	②	①～②	②	①～②
D假定	③	③	③	③
F過去	③	③	③	③
G中止	①～②	①	①～②	①
H中接	①	①	①	①
I連接	④～③～①	③～④～①	④～③～①	③～④～①
J否定	①	①	①	①

表9から、I類とII類のアクセントの違いは、どの活用形においても見られない。まずこの点で、名古屋と同様であると言える。以下、項目ごとに結果の詳細を述べる。

A終止形とA'連体形の相違はなく、A、A'およびB接合型で表9に示した型以外はほとんど現れなかった。語幹に長母音のある「遠い・多い」は①型と②型がほぼ半数ずつ現れた。これ

は、/oRi/, /toRi/における引き音/R/へのアクセント核付与(→②型)を避ける人がいるということであると考えられる。

D仮定形とF過去形も同様で、名古屋や岡崎と同様に③型である。上述したように、Dには～ケヤの語形と～ケリヤの語形があるが、この違いはアクセントに影響がないようである。

G中止形の「赤くて」「白くて」は共に①型が中心で、特にアカテ、シロテの語形(共に出現数10)はすべて①型であった。これは山口(2003)が示す名古屋と同じである。アカクテ(出現数17)、シロクテ(同14)の語形でも①型がほとんどであった(アカクテ①16, ②1, シロクテ①12, ②2)。逆に、引き音が入るアカーテ、シローテの語形は少数だが、②型のほうが多い(アカーテ②3, ①1, シローテ②4, ①1)。「遠くて」「多くて」は、引き音の入る例がトオーテ②の1名のみであり、おそらくこのことが影響して、ほとんど①型である(トオーテ①16, トークテ①15, ②1, トオーテ②1; オーテ①17, オークテ①14, ②1)。

I接続形においては④型と③型が拮抗するが、これは「～クナル」の「ク」または引き音があるかないかの違いである(アカクナル④8, アカーナル④11, アカナル③12; シロクナル④7, シローナル④9, シロナル③10; トークナル④9, トーナル③21; オークナル④9, オーナル③21)。いずれにしてもアクセント核は「ナㄱル」であり、「ク」か引き音が入る場合は「ナ」が4拍目、入らない場合は「ナ」が3拍目で、そこにアクセント核が置かれるということである。「ナㄱル」にアクセント核が置かれるのは名古屋と同じである(注1参照)。『NHK』の記述では共通語でもI類・II類ともに「ナㄱル」にアクセント核が置かれるが、II類のみ語幹にもアクセント核がある(例、I類:アマクナㄱル, II類:ウㄱマクナㄱル～ウマㄱナㄱル)。今回の調査では、語幹にアクセント核のある①型(「ナㄱル」の下がり目も伴う)も少数現れたが、II類のほうがその数が多い(I類アカクナル①4, トークナル①4; II類シロクナル①8, シローナル①1, シロナル①1, オークナル①6)。このことは、調査語数が少ないため断言はできないが、共通語の影響と考えられるかもしれない。①型はそのほとんどの場合に「ク」が入っており、語形が共通語化するものにアクセントの共通語化が起こっていると言えそうである。

H中接形とJ否定形では、最初のピッチ下降は1拍目の終わりに現れるので、表には①と表示したが、「ク」の有無に関わらず、Hで～テㄱモ、Jで～ナㄱイにも急激なピッチの下降が見られることが多い。特にJではほとんどの人で2回の下降が現れる。

## 3.2.2 4拍語

次に、4拍語の全体的傾向を見てみよう。

表10 多治見方言における4拍形容詞活用形のアクセント型

	I類		II類	
	明るい	うれしい	短い	
A 終止	③	③	③	
A' 連体	③	③	③	
B 接合	③	③	③	
D 仮定	④	④	④	
F 過去	④	④	④	
G 中止	②～③	②～③	②～③	
H 中接	②～③	②～③	②～③	
I 連接	⑤～④	④～⑤	⑤・④～②	
J 否定	②	②	②～③	

4拍語でも、語によるアクセントの違いはほとんど見られない。

G中止形とH中接形には②型と③型が見られるが、②型はアカルテ（出現数17）、ウレシテ（同18）、ミジカテ（同12）の語形が多く、「ク」入りのアカルクテ（同8）、ウレシクテ（同10）、ミジカクテ（同12）も現れた。少数派の③型はすべて「ク」または引き音が入り、アカルクテ（同5）、アカルーテ（同4）、ウレシクテ（同2）、ウレシーテ（同3）、ミジカクテ（同5）、ミジカーテ（同4）であった。

I連接形では、⑤型と④型が拮抗するが、これも3拍語の場合と同じく、「ク」もしくは引き音の有無によるところが大きい。④型はアカルナル（出現数10）、ウレシナル（同17）、ミジカナル（同13）であり、⑤型はアカルクナル（同13）、アカルーナル（同9）、ウレシクナル（同9）、ウレシーナル（同6）、ミジカクナル（同5）、ミジカーナル（同8）であり、これらはすべて「ナㄱル」にアクセント核がある。共通語的な②型と③型が合計12出現したが、そのうち10は「ク」があり（ミジカクナル②4、③3、アカルクナル②1、③2）、語形も共通語的である。

## 4. まとめ

本稿では、多治見市の各小学校校区生え抜きの高齢層における形容詞のアクセントの調査について、その結果を分析し、実態を明らかにした。その結果、調査対象者のあいだではアクセントの均質性が高く、明確な地域差は見られなかった。

市全体として、表2の予測のとおり、山口(2003)の記述による名古屋方言と同様にI類とII

類の相違はほとんどなかった。さらに、調査したすべての活用形において、名古屋方言と語形が同じであれば同じアクセント型が主流であることが確かめられた。

安藤 (2015) で検討した名詞と比較すると、動詞や形容詞では共通語化とみられるような現象がほとんど観察されないが、これは、活用語尾が共通語と異なる場合があるために、アクセントが付与される拍数や音節構造を含めた語形が異なることが、その一因であると考えられる。また、特に形容詞では、共通語のアクセントそのものがゆれている (塩田 2016 等) ことにより、明確な規範が伝わりにくいことも、共通語化しにくい要因として考えられるであろう。ただし、このように共通語化の進んでいない状態が、若年層においても継続しているかどうかについては、これからの調査に俟つところである。

最後に、本調査に御協力いただいた調査対象者の皆様に、心より御礼申し上げたい。

## 注

- 1) 山口 (2003: 124f) では、I 接続の注として、「形容詞は<ヨーナナル、ハヤナナル、スクナナナル>についていう。」としており、これによれば3拍語はアクセント核の位置が語頭から数えて「3」となる、もしくは形容詞自体には下がり目がない (ナルを独立したものとみなす場合) ので「0」と記述されることになるはずである。しかし、「赤い・早い」のI接続にアクセント核の位置としては表中で「1」と記述しており、そうであればアカナル・ハヤナルとなるはずである。この注と表の食い違いについての説明はない。山口 (1984: 13) では動詞ナルが下接するときは「赤く」も「白く」も①となると述べられており、山田 (2003) の記述もアカナル (~アコナル) であることから、「1」の記述が誤りであるとみられる。よって、表3では「?」を付けたうえで「アカナル」としておく。
- 2) 1934 初頭における各校区の自治体区分は岐阜県地域計画局市町村室編『岐阜県市町村合併等経過一覧表 平成 18 年 3 月 31 日現在』等による。これにより安藤 (2015, 2016) の記述を訂正する。

## 付記

本研究はJSPS 科研費 JP16K02622 の助成を受けたものである。

## 参考文献・資料

- 天野成昭・近藤公久編著 (2003)『日本語の語彙特性』第1期 CD-ROM 版 (NTT データベースシリーズ)、三省堂
- 安藤智子 (2013)「多治見方言における連母音の長母音化について」『富山大学人文学部紀要』58: 23-60
- 安藤智子 (2015)「多治見方言における名詞のアクセント」『富山大学人文学部紀要』62: 23-58
- 安藤智子 (2016)「多治見方言における動詞のアクセント (1)」『富山大学人文学部紀要』64: 39-69
- 江端義夫 (1987)「『早く』(形容詞連用形) の方言分布—中部日本地方域の方言について—」『広島大学教育学部紀要』第2部 36: 37-44
- 奥村三雄 (1976)『改訂増補 岐阜県方言の研究』大衆書房
- 岐阜県地域計画局市町村室編 (発行年不明)『岐阜県市町村合併等経過一覧表 平成 18 年 3 月 31 日現在』
- 金田一春彦 (1974)『国語アクセントの史的研究—原理と方法』塙書房

多治見方言における形容詞のアクセント

- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」『岩波講座日本語 11 方言』岩波書店 pp.129-180
- 金田一春彦 (1978) 「愛知県アクセントの系譜」『国語学論集』第一輯 笠間書院 pp.1-19
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』東京堂出版
- 小林めぐみ (2003) 「東京語における形容詞アクセントの変化とその要因」『音声研究』7(2): 101-113. 日本音声学会
- 塩田雄大 (2016) 「動詞・形容詞のアクセントをめぐる現況」『放送研究と調査』66(8): 82-96. NHK 放送文化研究所
- 多治見ことば編集委員会編著 (1974) 『多治見を中心とした土岐方言集』多治見市教育研究所
- 彦坂佳宣 (1989) 「東海西部地域における形容詞連用形音便の境界」『名古屋・方言研究会会報』6: 27-36
- 山口幸洋 (1984) 「愛知・岐阜のアクセント (1)」『名古屋・方言研究会会報』1: 7-19
- 山口幸洋 (1992) 「岐阜県下のアクセント (6)」『名古屋・方言研究会会報』9: 43-54
- 山口幸洋 (2003) 『日本語東京アクセントの成立』港の人
- 山田達也 (2003) 「名古屋方言における形容詞の変化とアクセント」『名古屋・方言研究会会報』20: 1-26
- NHK 放送文化研究所編 (1998) 『NHK 日本語発音アクセント辞典 新版』NHK 出版
- NHK 放送文化研究所編 (2016) 『NHK 日本語発音アクセント新辞典』NHK 出版